

視覚障害のある方は
ギャラリーの作品を
ふれて鑑賞することが可能です

会場の触図と展覧会解説が
ありますので、
受付にお申し出ください

奈良県立美術館へようこそ

奈良県立美術館は1973年に開館した、奈良県が運営する美術館です。

この夏は、2つの展覧会を開催しています。

ひとつは、コレクション展「**みやこのかたち** 奈良県立美術館・奈良県立万葉文化館コレクションから」と

ギャラリー企画「奈良ゆかりの現代作家展 **ふれる光 三輪途道**（みわみちよ）」展です。

展覧会は8月23日（日）まで開催しています。

コレクション展は、2階の展示室から始まります。

ギャラリー企画は、1階にある受付奥のギャラリーと、階段奥のロビー、ミュージアムショップの脇のスペースの3か所になります。

ギャラリーとロビーの触図を用意しています。作品の配置がわかるようになっています。

視覚障害のある方は、ギャラリーの展示作品をふれて鑑賞することが可能です。作品をふれるうえでの注意事項を確認のうえ、やさしくふれて鑑賞してください。

作品にふれるまえに・・・

- ・指輪や腕時計をはずしてください
- ・ウェットティッシュで手をふいてください
- ・手を洗う方は近くのトイレをご利用ください

ギャラリー企画 ふれる光 三輪途道

奈良県立美術館では、無料スペースの一角に地域ゆかりのアートや文化、教育活動などを紹介する目的でギャラリーを開設し、「奈良ゆかりの現代作家」を紹介する展覧会シリーズを開催しています。

この夏は、全盲の彫刻家、三輪途道さんの作品と活動を紹介する展覧会を開催しています。

三輪さんは、1966年、群馬県生まれ、現在も群馬県下仁田で制作をしています。三輪さんは、東京芸術大学で保存修復技術を学び、東大寺の俊乗堂の重源上人像（ちょうげんしょうにん）の模刻（模倣した彫刻をつくること）を行いました。そのほか、東大寺の依頼で菩提遷那（ぼだいせんな）像を制作するなど、仏像を制作した、奈良の歴史や文化に裏付けされた作品を制作してきた作家です。

三輪さんは、30代後半から網膜色素変性症（もうまくしきそへんせいしょう）のため、視力が弱まり、50代前半に全盲になりました。

全盲になっても彫刻家としての活動は継続しており、現在は、粘土を使って手の感覚だけで作品を制作しています。三輪さんは、目が見えなくなってから、「手が目である」と語っています。

ギャラリーの展示では、中央にあるのが、《光の存在―光明観音》という仏像です。日本で最初に福祉活動に尽力した光明皇后をテーマにした仏像です。両手をひろげゆったりとした姿勢からは、なにもものも受け止めるおおらかさを感じることができます。

この像は、石膏でつくられており、ふれるとひんやりとした、すべらかな感じがします。三輪さんは、自身の作品をふれて鑑賞するとき、手ざわりの感覚をととても大切にしています。

レリーフ作品『おそとねこ』

ギャラリーに入って左右の壁に、それぞれ4点ずつ、合計8点のレリーフ作品があります。レリーフ作品は、平面の表面に形を盛り上げるように彫り込んだり、肉付けして制作する「半立体」の造形表現です。絵画と彫刻の間のようなものです。

三輪さんにとって、絵画作品の制作は、このようなレリーフの形をとっています。

8点のレリーフは絵本『おそとねこ』の物語をもとに、三輪さんのオリジナルな視点を加えた新たな物語を絵画化したものです。

ギャラリーに展示している作品は、クリーム色の台にみどりやピンクなどの色がついています。目が見えない三輪さんは、クレヨンの位置で色を覚え、頭の中のイメージを持って、色を付けています。

この展示室にある、すべての作品は、三輪さんが全盲になってから制作された作品です。

レリーフの形にふれながら、どんな物語か想像してみてください。また、主人公の「ねこ」たちはどこにいらっしゃるのでしょうか？

ギャラリーを出て、階段奥のロビーには、「触察板の体験展示」のコーナーがあります。こちらに、「おそとねこ」の物語を記したパネルと触察板があります。次に、ロビーに移動してください。

展示室入って右側の壁の3点のレリーフは、仏像を創るためのエスキース（習作、お試しに作ったもの）です。

触察板『おそとねこ』

ギャラリーを出て、階段奥のロビーには、「触察板の体験展示」のコーナーがあります。こちらに「おそとねこ」の物語を記したパネルと触察板（しょくさついた）があります。

触察板は、視覚障害のある人も絵画を楽しめるように、ふれて形を理解できるように、木を彫り、漆をかけて制作したものです。三輪さんは、触察板の鑑賞では、ふれることともに、言葉で対話することも重要なものと考えています。

（以下は三輪さんのメッセージです）

みなさんこんにちは、三輪途道です。

この部屋は、見えないひとの気持ちになって、作品を鑑賞してください。

見える人はアイマスクをして作品にふれてみてください。

お友達、ご家族、この空間で出会った人にテキストを読んでもらい、おしゃべりしながら触ってほしいです。

さわることと言葉が一体になった作品です。

手とことばから照らされる光で、この作品をたのしんでみてください。

「おそとねこ」の物語のパネルが、触察板の上にあります。こちらを、一緒にいる人が読み上げてください。

「おそとねこ」の触察板は全部で8点あります。これは、ギャラリーで展示しているレリーフ作品の「おそとねこ」に対応しています。ここでも、主人公の「ねこ」はどこにいますでしょうか？

視覚障害のある方は、ロビーに展示している作品は、《かべとじめん》の原画を含め、すべて触れることが可能です。

視覚障害のある方へこちらの文章を読んでください

触察鑑賞ラボ

最後の展示室は「触察鑑賞ラボ」といいます。

ここでは、7月22日（水）、29日（水）、8月5日（水）の14時～16時の間、三輪さんが公開制作をします。作家の実際の制作の様子を見たり、作家とお話して交流する機会となります。

また、ここでは、三輪さんも関わっている一般社団法人メノキと株式会社ジンズの活動として「ミルミルつながるプロジェクト」の活動を紹介しています。

ガラスケースには、このプロジェクトを通して制作された群馬の郷土カルタ「上毛カルタ」の触察カルタを展示しています。

これらは、三輪さんが触察板を制作するきっかけとなった作品たちです。

黒い彫刻が中央の白い台に置かれていますが、こちらは、ギャラリーに展示している《光の存在—光明観音》の3D模造になります。これは木と漆で制作されています。こちらにも触れて鑑賞してください。

視覚障害のある方へこちらの文章を読んでください

《ひかりの存在—光明観音》 3D模造

見えない人のためのやさしい仏像観賞

3D模造を活用した文化財の観賞についての考察

三輪途道、山田修（奈良県立大学教授）共同研究

見えなくなっても博物館で、仏像を鑑賞したい、という私のわがままが山田さんの研究と合わせて光明観音で実現しました。

今までは模造を作る時は、本物の仏像から直接型取りで作られましたので、仏像を痛めるリスクがありました。ですが、3D縮小模造を活用することで、そのリスクはなくなるだけでなく、観賞にやさしい対応になります。

本物の仏像と同じ寸法ではないので、宗教的に本物を触るというイメージが払しょくされます。見えない人は手で抱えられる形でないと、理解しづらいのですが、縮小すると観賞は深まります。この考え方を広げると、美術館でも論理は成り立ちます。

是非これからの鑑賞方法に生かして下さい。そして私も普通に博物館と美術館に行ける日が来ることを願っています。